



広島国際学院
創立77年



「広島県立三次高等学校 体育祭の応援風景」

表紙写真=河野健次 撮影

第52回二科展 本展入選作品

地域に根ざし地域と歩む

特集 — HERO	2・3
バイオ・リサイクル学科新設記念講演会 工学部	4
情報学部開設記念講演会 情報学部	5
お好み焼き対決 現代社会学部	6
ぼくちの料理ショー 短期大学部	7
高校から発信 高等学校	8
留学生の声	9
私の大学生活	9
研究室紹介	10・11
運命の日	11
学生時代の思い出と社会人になって思うこと	12
サークルフェスティバル	12
学外展	12

広 報

第 59 号

平成16年10月1日発行

特

集

のぞいてみませんか？

HERO

Hiroshima Engineers Reaching Out

はじめに



図1 HEROの取り組み

HEROというネーミングは副題にも掲げていますように、広島エンジニアがお互いに手を取り合い、その卵たちに手を差し伸べてゆこうという考えから付けられました。昨年度まで、HEROのメンバーであったSandra V. Williams先生がその名付け親になります。そもそもHEROの発足は、昨年度、高大連携事業の公開講座を本学で実施したのがきっかけとなります。ここで、高校生だけでなく、広島県内の子供たちから一般の方に対して、何か貢献できないかと、私どもが喧々囂々していたところに、タイミングよく立町キャンパスが立ち上がり、はじめてHEROというネーミングで定期交流教育講座を実施した次第です。さらに本年度は、対象者を限定し、これらの2つの講座とメンバーをベースに、本学院生に対して、新しく多分野による体験プログラムを提供することとしました。学生の向学心やモ

ティベーションをより高めることを目的としています。また、より質の高いプログラムを提供するために、私どもの教育内容を向上させていかなければなりません。そこで、教育内容の評価を色々な方法で行い、メンバー自身が切磋琢磨するような新しい試みを考えております。現在、HEROは、図1に示すような、3つのベースを軸として運営しております。以下で、それぞれについて紹介させていただきます。

定期交流教育講座について



図2 講座内容

平成15年度末の2月～3月にかけて、立町キャンパスで定期交流教育講座を実施しました。実施内容は図2のようになっております。HEROは5学科の教員7名で実施し、私どもが掲げていた目的である幅広い講座を地域の人たちに提供することが出来ました。また、当初、本講座の広報活動に一番不安を感じておりましたが、フタをあけてみるとHEROが産経新聞（図3参照）に掲載され、企業などからHPにリンクをさせてほしいという依頼もありました。その結果、受講者の申込が多数あり（募集人数47名に対して申込受付人数51名）、受付をやむなくお断りするような盛況振りでした。図4は実際に講座を行っている様子です。通行人の視線の先をご覧ください！立町キャンパスで実施しましたので、本講座は注目の的となっていますね。宣伝効果は抜群です。

受講者からは、たくさん感謝の言葉や次回の講座を実施してくださいという声がありました。私どもはこういう声などが一番励みになり、次へのステップに繋がるものと確信しております。本講座に関する実施報告やアンケートの結果の詳細は<http://hero.hkg.ac.jp>をご覧ください。

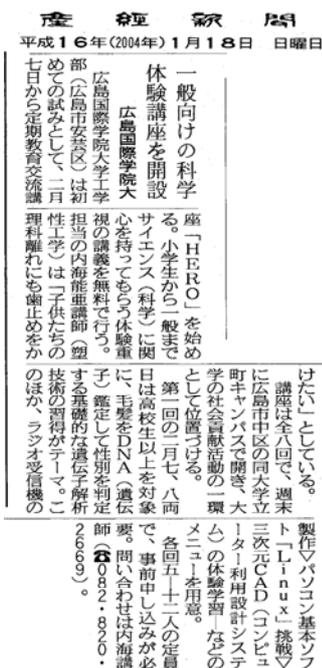


図3 産経新聞

高大連携事業の公開講座について

平成15、16年度の6、7月の土曜日に実施しましたが、HEROを掲げたのは16年度からになります。講座名は「HERO—楽しいエンジニアリングの世界—」としました。HEROは、『色々探検隊—実験装置を自作して身の回りの光を調べよう—』『数値シミュレーションと高性能コンピュータ』『手作り簡単電子回路』『ロボットを動かそう』『やさしい3次元CAD(図5参照)』の5つの講座から構成され、情報工、情報デザイン、電気電子工、機械工学科の4学科で、6名の教員で実施しました。

これまで6名の高校生の申込がありましたが、受講者はのべで4名でした。受講した生徒は将来の目的がはっきりしている高校生でした。本講座に関する実施報告やアンケートの結果の詳細は<http://hero.hkg.ac.jp>をご覧ください。



図5 公開講座の様子

図4 宣伝効果!?



多分野による体験プログラムについて

本年度からの新しい試みで、学部、学科という組織の枠をとりはらい、また、授業単位を設けず、課外活動的なHEROを実施致します(図6参照)。HEROは、より柔軟な教育サービス(本学院内への提供)を行います。HEROは、大学が掲げる「親切・丁寧な教育」という目標に対する1つの具体例と考えています。HEROは、5学科から7名の教員で構成されております。対象者は本学の学生であれば誰でも受講可能ですが、大学入学から時間があまり経過していない1、2年生を基本に考えています。他分野に関心を持ち、自己の専門分野との繋がりを深く理解し、学生の将来をより明るく照らそうというのがねらいになります。講義や体験をおりませた構成で、14の提供可能なプログラムを準備しています。

さらに、私どもの教育の成果や評価を何らかの形で確認することが重要だと考えております。具体的には、各体験プログラムをビデオ撮影し、その内容の評価をHEROのメンバーで行うことや、学生と教員のディスカッション、アンケートの実施などにより、今後の教育の質の向上とともに、学生のモチベーションを高める支援を考えております。体験プログラムに関する実施報告など、本年度末までには掲載させていただきますので、詳細は<http://hero.hkg.ac.jp>をご覧ください。



図6 体験プログラムのポスター

バイオ・リサイクル学科新設記念講演会

工学部

(立町キャンパス地域技術教育支援プログラム)

中高大連携「循環型社会と理化・技術教育」シンポジウム

厳しいコスト競争と長い不況の中で日本人が失った自信は、利益損失とは比べようのないほど大きいといわれている。青少年の「理化・技術離れ」もこれと無縁ではない。

21世紀は環境、資源の時代といわれ、「感性」、「ものづくり」を中心とした日本の伝統技術・技能の復権を求める声の高まりとともに、中学・高校ではかなり早い時期から青少年への理化・技術教育のあり方を模索し経験と知恵を蓄積してきた経緯がある。

「地域技術教育支援プログラム」は、こうした背景を踏まえ、中学・高校・大学、更には企業が連携して地域理化・技術教育を模索、あるいは推進する場を提供することを目的として学科主任の有志が学内組織の協力を得ながら企画した。

この一環として、「循環型社会、ものづくり、伝統技術・技能」をキーワードとして、7月19日(日)、13:30~17:10に70名の参加者を得て、本学立町キャンパスで「循環型社会と理化・技術教育」シンポジウムを実施した。今回はバイオ・リサイクル学科新設記念の意味もあり、以下の事例を取り上げた。

- (1) 「循環型社会における農業教育」 のとはら 咽原 章氏 (広島県立西条農業高等学校)
- (2) 「広島のみこの雲」 大亀信行氏 (広島国際学院高等学校)
- (3) 「アルミリサイクルにみる理化教育」 沖本富和氏 (広島県立宮島高工業等学校)
- (4) 「循環型社会での技術・技能」 遠藤敏郎氏 (広島国際学院大学)

咽原氏は日本の農業が水資源と環境を有効に保全してきた例を上げ、農業教育が正に21世紀の環境教育にふさわしいものであると主張し、日本の伝統技術・技能のすばらしさを伝えてくれた。大亀氏は平和都市：広島ならではの原爆を題材として環境破壊を取りあげた。生徒とともに収集した原爆瓦表面を参加者に観察させながら、新しい視点からの事実認定を提示し学生に大きな感銘を与えていた。沖本氏はアルミ缶の溶解を通して、生徒にリサイクル手法を考えさせた実にユニークなりサイクル教育手法を紹介し、体験教育の重要性を聴講した学生たちに的確に伝えていた。

今回のシンポジウムを通して高校の理化・技術教育現場の努力と、何よりも教育現場の熱意を痛感した。こうした熱意と各講師が目指す方向を、同じ使命を担う大学教育でどのように連動させるかは高校生の進路開拓と合わせて重要な今日的課題であることは事実である。

終了後、講師との懇親会でも話題となったが、中学・高校・大学間の連動した理化・技術教育、更には企業も交えた教育と教育手法、或いは進路開拓の模索は益々重要になってくると思われる。今回のシンポジウムを1つのステップとして次回のテーマと講師の検討を進めている。



「工学部」「情報学部」

オープンキャンパスで魅力を伝える

7月10日(土)のオープンキャンパスは朝一番のどしゃ降りでも幕開けしたが、その後好天に恵まれた。午前中は各学科が趣向を凝らしての展示や見学、模擬実験や体験などの出展と、午後からはキャンパスライフの楽しい一面を感じてもらうために、初めての試みとしてサークルフェスティバル(学生主催の夏祭りイベント)に参加してもらった。



参加者はそれぞれ「説明が親切だった」「学科の内容が良くわかった」「想像よりも良い環境だった」など参加してよかったと感想を述べている。サークルフェスティバルに関してはもっと見たかったという意見もあるが、それ自体の参加者が少なかった。参加すれば良さを感じるのだけれど、参加したいほどの興味が無いというのが現状ではないだろうか。ミニイベントにするなどもう一工夫必要である。



8月7日(土)の夏休みに開催したオープンキャンパスは、朝から気温が上昇し酷暑の一日となった。2004年度3回目の開催ということで、広島国際学院高校か

情報学部

情報学部開設記念講演会

情報学部開設記念講演会の開催

平成16年4月に情報学部が新設されたことを記念して、「情報技術の現在と未来」と題し立町キャンパスで講演会を行った。8月21日から9月18日までの毎週土曜日に計4回開催した。時間は午後1時30分から3時までであった。一般の社会人が数多く参加した。各講演の後には矢継ぎ早に質問が寄せられ、関心の高さがうかがえた。講演題目は次の通りであった。

- 8月21日：「スーパーコンピュータと数値シミュレーション」
情報工学科主任教授 青井秀樹
- 8月28日：「情報技術と21世紀の生活」
情報工学科教授 三好一賢
- 9月4日：「音の仕組みと環境騒音-音響情報工学」
情報デザイン学科主任教授 高桑誠明
- 9月18日：「情報技術をささえるハードウェア技術」
情報学部長 檜高靖治



運転中のケータイはNG！ ー交通安全講話を開くー

9月16日、後期ガイダンスに併せ1・2年生を対象とした交通安全講話を開いた。春に続き、広島県海田警察署の協力を得て実施された。

広島県下で発生した交通事故は14,000件に上り、事故防止のため一層の啓発が必要とされている。

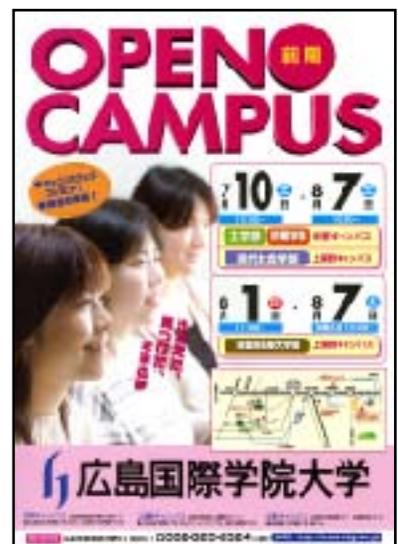
佐々木秀樹交通課長は、運転中の携帯電話の使用が11月1日から取り締まりの対象になるなどと述べた上で「加害者にも被害者にもならないように」と学生たちに説いた。なお短期大学部でも、15日のガイダンスで同様の講話があった。



オープンキャンパス

らの送迎バスや、同日開催している現代社会学部の上瀬野キャンパスとシャトルバスで結ぶなど新しい試みを加えた。前回同様の多彩な出展や体験のほか、学生クラブ「表千家茶道愛好会」によるお茶席、体育館トレーニングジム体験などの新企画を設けた。「お茶席」は予定人数を上回る大盛況で、初心者にも親切丁寧な指導により豊かなひとときを過ごした。またキャンパスアドバイザーと称する在学生の案内役を配置して、授業の魅力やおもしろい先生の話、キャンパスライフの経験談を語ったり、わかりやすく親しみやすい案内を心掛けた。

参加者からのアンケートでは、キャンパスアドバイザーが好評で、「施設」「サークル活動」「人間関係」「授業」などの裏話に人気があった。各学科の出展では、「学科の内容」「研究内容」「施設」「装置」などの理解を深めている。なお、一部では「短時間の説明でわかりにくかった」「説明が難しすぎた」などの指摘もあり、今後改善に取り組むたい。



美味三つどもえ お好み焼き対決



6月30日（水）午後5時より食堂前広場で「お好み焼き対決」を開催した。当日は現代社会学部の学生・院生・教職員に加え、短大や中野キャンパスからもゲスト参加があり、総勢70名以上となった。当初は広島風お好み焼きチームと東京風もんじゃ焼きチームに関西風たこ焼きチームが挑むという「対決」が予定されていたが、鉄板に火が入るや「焼き手」と「審査員（試食者）」が入り乱れ、和気あいあいと時間を過ごした。皆が教室とは違う顔で焼いたり頬張ったりする様子は印象深かった。

現代社会学部キャンパスライフ委員会では、さまざまな学内イベントを学生と共に企画・運営し、学内に友人関係を築く場を作り出している。

BMXショー 夢も描いた自転車パフォーマンス

7月10日（土）、現代社会学部食堂前広場でBMX FLATLANDのデモンストレーション・ショーが開催された。BMXとはバイシクルモトクロスの略でモトクロス自転車のこと。今回のショーではHIPHOPなどの音楽が流れるなか、後輪タイヤだけでスピンしたり、前輪タイヤを上げたまま走るといった演技をした。ライダーは6人で、その中には3月に卒業したプロの坪井浩紀さんもいた。世界で2人にしかできない技も披露され、観客はその華麗でダイナミックな技の連続に30分間魅了された。



今回のイベントでは、1年生を中心とした学生ボランティアがポスター貼りから当日の運営をサポートした。夢に向かってひたむきに努力する先輩の姿に学生達は多くを学んだに違いない。



現代社会学部オープンキャンパス

学生アイデアで新企画 盛り上がる議論

8月7日（土）、現代社会学部では、上瀬野キャンパスを会場として、オープンキャンパスを開催した。

当日は、「『千と千尋』の地域社会学」、「お笑い番組の今昔」、「アンケート調査の分析体験」の三つの模擬授業と、受験対策講座として小論文指導の講義を設け、多くの参加者を得た。

展示コーナーでは、社会学や社会調査に関する講義および実習、また、社会調査士、社会福祉士など、現代社会学部で取得できる資格についての展示を行った。

大学生活に関する相談コーナーの他、学生による新規企画として公開討論会「しゃべれ場」が設けられ、高校生にも参加してもらい熱のこもった議論が展開した。

参加者のアンケート調査では、「現代社会学部について興味を持てた」人が89%、「現代社会学部でどのような勉強ができるのか」について「わかった」人が96%を占めるなど、好評のうちに幕を閉じた。



6月26日、大雨注意報の中で第2回下宿生交流会を行った。前回、自炊している学生が大半と判ったので、初の料理教室を実施した。まず難問と思われた場所と講師は地元の温かい協力でクリアしたが、雨の影響か、参加者は学生9名、教職員7名の16名であった。

まずは買い物の手ほどきからと、近くのコープへ。地元の新鮮な野菜売場の紹介から、冷凍食品や手軽な調味料などの説明を受けながらショッピングを楽しんだ。

いよいよ調理開始。初めは料理研究家の先生の簡単な説明と手際よい包丁さばきに見とれるばかりであったが、「ハイ、この先は誰かしなさい」と次々に振り分けられ、おずおずと手を出し始めた。包丁を握り野菜を刻み始める学生の仕草が意外にうまい。何時の間にか4つの調理台に自然に4名ずつが分かれ、レシピを見たり講師に聞いたりして勝手に動き始めると、時間の経つのも忘れて料理に熱中。スパゲッティ3種をはじめ、ご飯を簡単にチャーハン仕立てにしたものやサーモンのミルクスープなどそれぞれの調理台で2、3品、餃子は全員が楽しみながら作り、全部で9品が並んだときには歓喜の声が上がった。最後に講師からの、残り物などを無駄なく使って簡単に作れるメニューや栄養のバランスについての話を織り交ぜながらの気配りのある指導は見事で、有意義な一日であった。



学生シェフの腕前は？



餃子包みも皆で楽しく



完成！試食が待ち遠しい



研究発表（立町）



実習場見学

全国8自短、広島に集う

8月2～4日の3日間、全国自動車短期大学協会の研究発表会が立町キャンパスを中心に行われた。8短大の持ち回りによる開催で、今年には本学が当番校になった。各短大より1テーマずつの研究発表がなされた。「菜種油や牛脂と軽油の混合燃料」、「モンゴルでの電気自動車の実験」等、ユニークなテーマがあって、質疑応答も活発に行われた。昼食休憩時には、予定になかった学長の原子爆弾に関する講話も飛び出し極めて好評であった。特別講演には工学部の「水博士」佐々木教授が「名水と地域文化」と題して講演。山の手入れをしなくなると名水に大腸菌が増え飲めなくなる、軟水と硬水とでは石に当たって流れる音はどう違うか、錦鯉の肌は軟水と硬水のどちらがきれいになるか等時間が経つのも忘れ聞き入っていた。

最終日の研修会のキーワードは「名水」と「リサイクル」。「名水」に関係の深い酒類総合研究所と白牡丹酒造及び、車が廃車になって後、どのようにリサイクルされるかの工程がよく分かるリサイクル工場「LEEA」を見学した。



LEEA見学



白牡丹酒造を見学



四大から本学へ

自動車短期大学部1年 住吉 千晃

私は大阪の四大へ通っていました。その大学には興味もあり、やりたいことがあって入学したのですが、1年間の学生生活で車と接することが増えるにつれて、自然に車に興味を持ち始めました。遂には、その時専攻していた学問より車への関心の方が強くなって、のめり込むようになりました。将来は整備士になりたいという強い意志を持つようになりましました。突然の心境の変化ですが、勿論、車の構造や機能を知っているわけではなく、どこで何を勉強すべきか、整備士とは何かなど、何も知りません。2年生になって自分なりに幾つかの専門学校を調べました。広島之母から自動車短大があると聞き、大学なら自動車の専門科目以外の基礎教養科目も勉強できると思い、この短大を選びました。寄り道した分マイナスになるかもしれませんが、長い人生、絶対プラスにしてみせる。辛く厳しいことがあっても自分で決めた道です。最後までやり遂げるぞという強い気持ちで再びスタートしています。

海田町クリーンキャンペーンに140名が参加する

去る6月20日(日)に開催された「海田町クリーンキャンペーン」に本校も参加した。当日は各クラブ部員や有志が集まり、総勢140名が町内清掃に取り組んだ。学校周りでは三迫川に入り、地元の人達と一緒に捨てられた空き缶やゴミを集めていた。



インターハイ出場30回「特別表彰」受賞する

—レスリング部—

8月2日(月)から5日(木)にかけて、レスリング部がインターハイに出場した。これで、学校対抗(団体)として通算30回出場することになった。インターハイに出場することだけでも難しいのに、30回も出場するというこの輝かしい成績に対して、全国高体連から功績を称える特別表彰が授与された。



特別表彰盾を手にする
中村伸先生
(レスリング部顧問)



●●●● 中国大会金賞連続受賞! ●●●●

8月7日から8日、厚生年金ホールで全日本吹奏楽コンクール県予選が開催された。本校吹奏楽部はA部門およびB部門に出場した。A部門は、金賞を受賞すると共に晴れて中国大会出場権(広島県から4校)を獲得する。またB部門(小編成)も連続して金賞を受賞した。過去2年続けて全日本吹奏楽大会に出場し、「マルタ賞」を受賞するなど、その実力をいかに発揮した成果であった。8月27日から28日に周南市で行われた中国大会でも華麗な演奏で金賞を受賞したが、全国大会への出場は惜しくも逃がした。

●●● 10回目のオーストラリア姉妹校訪問 ●●●

「うわあー、すごい」口々に発せられる感動の言葉。実際にこの景色を見た人にしか分からない雄大な自然。野生のコアラにも遭遇した。大自然に囲まれて自分を見つめ直す絶好の機会がこのプログラムにはある。



7月13日(火)から7月27日(火)の15日間にわたり、オーストラリアの姉妹校、グローブデール・カレッジを訪問した。今回、参加者が9名と少なかったのが残念ではあったが、滞在中は暖かく過ごしやすい毎日だった。天候だけでなく、姉妹校でも温かく迎えられ、日本語クラスとの交流も深めることができた。次回からは、いろんな教科の授業も体験できるようにしていきたい。



●●● 甲子園をめざして! 野球場本部席・雨天練習場完成! ●●●

放課後のグラウンドに大きな声が飛び交う。野球部、サッカー部、陸上部、テニス部、ソフトボール部など多くのクラブの部員達が、グラウンド狭しと練習に励んでいる。そのグラウンドにひととき目立つ「野球場本部席」と「雨天練習場」が忽然と姿をあらわし、みんなを驚かせている。

この夏休みを利用して、上部に観覧スタンドを備えた野球場本部席をバックネット裏に建築した。本校は公式試合の会場校にもかかわらず、本部席がなく観覧席も狭いことから不便を強いられていたが、素晴らしい施設がここに完成した。また、隣には不便な三角地を利用して「雨天練習場」も建設した。雨の多い梅雨時や厳冬期にも練習したいという長年の念願が叶うことになった。この「雨天練習場」は、野球部は勿論他のクラブも利用することでより有効活用されることが期待されている。



留学生の声

初志も親との約束も忘れず

電気工学科4年 崔 鐘南 さい しょうなん



3年前、私は好奇心いっぱい中国のハルビンからやって来ました。短大の時に日本人の先生と出会い、日本語を教わると同時に世界各国から来た留学生を紹介してもらったのです。彼らと会話するうち、国際交流に強い関心を持つようになりました。いつの間にか、世界を舞台にした仕事をしながら国際交流に貢献するのが私の夢になっていました。その夢を持ち、中学校から習ってきた日本語を生かすつもりで先進技術を誇る日本に来たのです。

短大卒業後すぐのことで社会経験も無く、また日本には全然知り合いがいなかったので、親は反対こそしませんでした。ひどく心配そうでした。しかし、どうしても日本に行きたいという私の気持ちのほうが強かったため、結局親も納得してくれました。その時私は絶対にまじめに勉強して親を安心させなきゃって決めました。

高校のときから短大卒業までずっと学校の寮に住んでいましたし、親元を離れての一人暮らしには慣れているつもりでした。自信满满で日本にやって来たのもつかの間、同じ一人暮らしでも母国と異国では全然違うことを感じ、着いたその夜から激しく落ち込むようになってしまいました。そんな私が今日もこの学校にいられるのはみんな先生方のおかげです。私が入学した頃にはまだ留学生が少なかったこともあるかも知れませんが、事務の先生方から実際に教えて下さる先生方までみんなが私のことを心配し、いろんなことで助けて下さいました。ほんとに感謝しています。

中国にいるときはしたことがなかったアルバイトも、日本に来て始めました。最初は生活のためにするものだと思っていたアルバイトですが、単にそれだけじゃないと分かってきました。職場にもお客さんにもいろんな人がいます。彼らを通して日本の社会を認識し、日本の一般の人たちが送っている生活を知りました。アルバイトは楽しくて意味があるものだと思います。

4年生になり、就職を考えたこともあったのですが、せっかく来たのもっと勉強したいと思い、大学院に入ることにしました。日本に来る前の初志も親との約束も忘れず、これからも頑張っていきたいと思います。

多くの学生たちは大学で学生生活を終え、社会に出て行きます。今のうちに精いっぱい学生生活を楽しむべきでしょう。私も残り時間わずかですが、充実した毎日を過ごしたいと思います。皆さんも悔いのない大学生活を送れるように頑張ってください！

私の大学生活

イベントサークルと学生起業 情報工学科4年 染田屋 晶子 そめたや しょうこ



私はVOD放送通信研究会に所属していました。大学祭やイベントの裏方をやるサークルで、役職は音響をしておりました。1年生の頃にサークルのホームページを制作し、3年になった時にイベントの依頼が来ました。それは私の母校の先生からで、文化祭2日間の進行と音響をしてほしいとのことでした。

文化祭の一日目の開始の時、音響のミキサーの所にて調整をしていると突然「染田屋さん、前に出てください」と言われました。何も聞いていなかったのですが、おろおろと生徒の拍手で前に出ると「一言どうぞ」とマイクを持たされ、ついこの間まで生徒だった私が全校生徒の前で話したのです。このことはとても印象に残っており、少しでも貢献できたかなと思うとうれしくなりました。

他には、ある塾の激励会の音響もしましたし、FM局の方と一緒に大学のオープンキャンパスを手伝ったり、18年間途絶えていた自主企画イベントを復活させたりといろいろなことをみんなでしてきました。

このように書くとは順調にできたように見えますが、サークルの中では問題が起こって大変なことになったり物事がうまくいかなかったり、人間関係の問題があったりとそう簡単にはいきませんでした。しかしそれを含めていろいろな人と知り合い関わったことは本当に楽しいと思えます。

引退した後は「カレイドスコープ」という大学が支援している学生起業組織に所属し、バイオ・リサイクル学科のWEBサイトを製作しました。今は立町キャンパスに関わるWEBサイトを考えており、有限会社にする為に活動をしています。



母校・広島県立高陽東高校にて

研究室

本研究室は平成8年の大学院発足時に設置された工学研究科物質工学専攻の生体材料研究室(主管:佐々木健教授)を母体とし、本年4月の工学部バイオ・リサイクル学科新設に伴い、バイオ・リサイクル学科と大学院物質工学専攻、双方の機能を備えた研究室として発足した。本研究室は、環境修復、遺伝子解析・組換え、有用物質生産の3本柱を基に、①海洋性微生物を利用した有害金属類(重金属類)除去・回収技術の開発ならびにメカニズムの解明②洗米排水の高速処理



研究室メンバー。中央が筆者



洗米排水処理実験

システムの開発③遺伝子組換え技術を利用した有用物質生産性向上に関する研究を大学院生らと共に行っている。②の研究は(株)サタケ、(株)食協との共同研究である。バイオ・リサイクル学科は、バイオ、マテリアル技術を主体としたリサイクル技術者の育成を狙っていることもあり、バイオ技術者認定試験、公害防止管理者、修習技術者(技術士補)などの資格取得支援を行っている。本研究室では上記資格の



2D電気泳動・質量分析計によるタンパク質の検出、同定。



手作りヨーグルトの試作・顕微鏡による乳酸菌の観察(導入教育)。

の生物工学、遺伝子工学分野の教育支援を担当。また、導入教育(バイオ・リサイクル学科)、横断型教育プログラム、HERO(Hiroshima Engineers Reaching Out)では、DNA解析技術、遺伝子組換え技術、遺伝子組換え農作物(GMO)、発酵食品などの講義・体験学習を通じて、生活に密着した話題、知識の提供を行っている。最後に、バイオ・リサイクル学科では、本年度発足時に様々なバイオ系、マテリアル系の分析機器が導入された。御興味のある方々からの見学を随時受け付けている。



工学部 バイオ・リサイクル学科

わた なべ まさ のり
渡 辺 昌 規 研究室

バイオテクノロジーで可能にするリサイクル



情報学部 情報工学科

うた たに まさ ひろ
歌 谷 昌 弘 研究室

太陽電池、電気自動車 …手作りで進める研究



筆者



学生の工作風景

本研究室は、自然エネルギー利用に必要なシステムの開発や、電気自動車や教育支援環境に関する研究を学生が実際に頭だけでなく手足も使って行うようにしている。

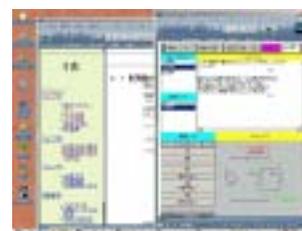
自然エネルギー利用に関する研究では、地球の自転にあわせて太陽電池パネルを移動させ、効率よく電気を発電するシステムや、強い風が持続して吹かないこの中野キャンパスで利用可能な風力発電システムの製作を進めている。一方電気自動車に関する研究では、バッテリー駆動の電動ドリルを利用した電気自動車の製作したノウハウを利用して、今年からは、50ccエンジンを搭載するカートの車体を利用した4輪の本格的な電気自動車の製作を試みている。

教育支援システムに関する研究では、JAVAを使用して、インタラクティブな自習支援環境の開発を進めている。この自習支援環境の構築に関する研究は様々な場所でのろんな教科について進められているが、本研究室では電力工学とそれに関連した教科の支援を目指している。

これらの研究で必要となる装置やソフトは基本的に全て学生の手作りで進めるようにしている。



太陽電池



自習教材例

の 紹 介 ● ● ●

ヒロシマからアジアシマ、さらに世界(ワールドシマ)へ

私の研究は地理学である。地理は自然・人文にまたがる学際的分野である。

私は広島に生まれた。広島の町の生い立ちや町の特徴に興味があった。さらに世界最初の被爆都市として、世界に「ノーモアヒロシマズ」の精神を訴えて行かねばならない使命がある。

大学時代に優れた恩師に恵まれ、広島をテーマに札幌、仙台、広島、福岡の比較研究を行い都市地理学、都市問題の研究へと広がっていった。さらにインド、アジア、第三世界の都市研究に広がっていった。



まず、地域や世界の国々を知ること。
環境保全も平和もそこからはじまる。

一方地理教育の面では日本の諸地域、世界の国々をよく知ることで、偏見と差別をなくし、地球環境を守り、持続する社会を作るための地球環境の保全、人々の国際理解を進めるためユネスコの活動にも協力している。

現在私の研究室の学部生・院生は地域の問題、町づくり・村づくり、都市問題、さらに環境問題など様々なテーマに取り組んで、前述の私の研究と歩みを共にしている。



現代社会学部

きた がわ けん し
北川 建次 研究室

運命の日 Ph.D.(文学)取得

工学部機械工学科・前 沖 壽 孝

2003年7月15日は私の運命の日。その日行われる学位記授与式に参列するため米国へ飛び立った。

元指導教官である吉田弘重教授（広島大学文学部英文学科学大学院第三講座）の講義に共鳴し、マーク・トウェインの著作を読み漁った。気が付いてみると毎晩2時3時。いつしか、メモを取り始めた。それらをまとめて論文を書いた。その論文をトウェイン生誕の地、米国で評価して貰いたかった。1993年6月7日、ハーバード大学に最初の論文を持参した。8年後、同大学長ローレンス・サマーズ氏からクレイトン大学で私の論文を審査している旨の手紙が来た。「継続は力なり」とはよく言ったものだ。論文を持参し続けて10年目、クレイトン大学からPh.D.(文学)の学位記を授与すると連絡があった。論文の題目は「マーク・トウェイン作『ハックルベリー・フィンの冒険』に表出される方言研究」である。

ところで、トウェインは同作品の冒頭に「作品中の方言を詮索したものは殺す」と注意書を記している。それ故、私には2003年7月15日は運命の日なのである。たぶん、あの世に居るトウェインに最初に殺されるのは私であろう。

本稿を拝借して、次の方々に心中よりの謝意を表す。資料提供・ハーバード大学への紹介状等にご尽力頂いた吉田弘重氏、大学の橋渡しを継続して頂いたローレンス・サマーズ氏、論文を評価して頂いたクレイトン大学学長ユージン・ストーン氏。最後に、米国を代表して学位記の確認書を添えてくださった国務長官コリン・パウエル氏にもお礼申し上げる。



トウェインの膨大な著作の一部。手前は『ハックルベリー・フィン』



パウエル国務長官のサイン



論文と学位記を持つ筆者
学位記の確認書にはパウエル国務長官のサインが記されている



学生時代の思い出と
社会人になって思うこと

春風に夢を乗せて……

高等学校機械科 平成9年3月卒業

梶本 語
といもと かなたろ

春、幾度となく瀬野川沿いの桜並木に心奪われた。思い起こせば学生時分、この満開の桜に幾度心洗われた事か。入学当時、地元江田島からの通学者は私しか居らず、頼る者の無い孤独な通学を優しく導いてくれたのは、他ならぬこの桜の樹木であったのかもしれない。今現在、私は地元江田島町で切串港⇄呉ポートピアパーク港の切符販売員として働いている。

この航路は、今から三年ほど前に開港した新航路だ。この航路が出来た御蔭で、江田島から呉方面、東広島方面のアクセスが飛躍的に改善されたのは言うまでもなく、母校国際学院までのアクセスもまた然りである。

その為、私が通学していた当時とは比べ物にならない程、国際学院の生徒が増えた。

国際学院がまだ電機大学附属高等学校であった頃には、想像すらできなかった事だろう。

江田島からの通学者のバイオニアとしては嬉しい限りである。朝、後輩達の「おはようございます」の声に未来を感じ、一人微笑ましい気持ちになる。

思えば、人との接触を極力拒んでいた私に、人と人との繋がりの大切さを教えてくれたのは他でもなく国際学院で過ごした三年間にあるのだ。

その中で、後輩達もまた成長していくのであろう。そんな姿を鑑みて、私はまた学ばされている。

ふと思う、学ぶ事とは学ぶ者を観て再び学ぶものなのではないかと。そして、桜並木が教えてくれたものは、そんな人の心であり調和の大切さであったのかもしれない。



第一回サークルフェスティバル 文武両道だよ！全員集合



7月10日に第一回サークルフェスティバルを開催した。主催は広島国際学院大学学友会体育局並びに学友会文化局であった。一昨年までであったクロウジングフェスティバルを一新、初の両局主催行事として、名称もサークルフェスティバルに改めた。テーマは『復活祭だよ！全員集合』。行事名が違うため、地域の人にわかりやすくした。

クロウジングフェスティバルとの大きな違いは体育局・文化局の合同主催になったことと、演武祭が加わったことである。初めて見る演武祭はとても感動的で、言葉では言い表せない。ぜひ来年見に来られるようおすすめする。演武・ライブ・ゲーム・花火とたくさんの企画を、来年はもっとたくさんの人に見て参加していただきたい。

開催中に雨に見舞われ一時中断したが、中止になることなく最後まで続けることが出来た。500人以上の人に来ていただき、今後も続けていくつもりだ。第一回ということもあり、オープンキャンパスも兼ねていたので、最初はどうなるのか不安だったが、大勢の人に支えられ大成功に終わることが出来た。参加していただいた人々、手伝ってくださった皆様に感謝している。

飛翔 第16回学外展

学生と教職員 合同で演出

6月19・20日、アステールプラザ市民ギャラリーにて第16回学外展「飛翔」が開催された。広島国際学院大学学友会文化局が主催した。文化系サークル（美術研究同好会、電子計算機研修会、自然研究同好会、ロボット研究愛好会）並びに教職員写真部が出演。教職員写真部と学生のサークルが合同で学外展を演出するという初の試みだった。教職員の洗練された写真と学生の新鮮味あふれる出展物とで、今までよりもいっそう見所のある学外展となった。

電子計算機研修会のパソコンで製作されたゲームなどは子供受けがよかった。

美術研究同好会の動く着ぐるみ、自然研究同好会のリサイクル問題について、ロボット研究愛好会のペットボトルロボットなど、それぞれのサークルの個性あふれる展示には目を見張るものがあった。来場者数も前年を上回る350人を超え、年齢層も幅広く、お年寄りから子供まで楽しめる学外展を演出出来た。

事故もなく、盛況の内に学外展が出来たことを局員・サークル員一同喜んでおります。来場された方々に厚くお礼申し上げます。



この広報誌はホームページでご覧になれます。 <http://www.hkg.ac.jp/kikaku/kouhou/>